

人間的力量育成科目の体系化に向けた共通性と個別性の抽出

村松慶一^{*1}, 松居辰則^{*2}

^{*1} 早稲田大学グローバルエデュケーションセンター

^{*2} 早稲田大学人間科学学術院

Extraction of Common and Individual Characteristics toward Systematization of Courses for Self-competence Development

Keiichi Muramatsu ^{*1}, Tatsunori Matsui^{*2}

^{*1} Global Education Center, Waseda University

^{*2} Faculty of Human Sciences, Waseda University

The Global Education Center of Waseda University offers educational programs for "self-development" as one of the academic skills that all students should acquire in common. In this educational area, students are required to select courses that are in accordance with their interests and form a cycle of theory and practice. This report describes an attempt to clarify the common and individual characteristics of the courses by expressing the educational goals of the courses as constructs. As a result of analyzing the constructs, they were classified into 16 classes, and the relationship between subjects and classes could be used to characterize the courses.

キーワード: 人間的力量育成, 導入教育, 科目の体系化, コンストラクト, 共通性と個別性

1. はじめに

早稲田大学グローバルエデュケーションセンター(以下, GEC)では, 全ての学生が共通に身につけるべき学術的スキルのひとつとして, 人間的力量育成(self-competence development)の教育プログラムを提供している。人間的力量という概念は, 早稲田大学の教育・研究ポリシーを表現する上で重要であり, 答えのない問題に挑戦する「たくましい知性」を鍛え, 多様な価値観を持つ人々に敬意をもって接し理解する「しなやかな感性」を育むという教育方針として表現されている。また, GECにおける「たくましい知性」と「しなやかな感性」を育成する取り組みは, 正課の科目を起点として正課外の活動まで含めた理論と実践の往還を目指すものである。

これまでに, 人間的力量育成のために導入科目を試

行した⁽¹⁾。具体的には, 世間一般, 仕事, 自己に対する態度について学生自身の認識あるいは再認識を促すことをコンセプトとして授業を設計し実施した。これによって, 自身にとって修得の必要な正課の科目と正課外の活動を学生が自ら選択する意識づけができたと考えられる。目指すところである理論と実践の往還の実現には, 正課の科目と正課外の活動を円滑に接続する必要がある。そのため, 人間的力量育成科目の共通性や個別性について整理することで, 人間的力量育成に関わる正課の科目と正課外の活動を体系化することが課題である。

本報告では, 正課の科目であるキャリア形成, ダイバーシティ, ボランティア, 地域連携, リーダーシップ, ビジネス創出の科目群に焦点を絞り, それらの体系化に向けて実施した調査と分析について述べる。具体的には, 学生のコンストラクトに着目して, 人間的力

量育成科目の担当教員が当該科目の学習活動において学生に関連付けを期待する視点・観点を調査し、その分類を行うことで各科目の共通性と個別性を明確にする。コンストラクトの考え方については、次節で述べる。

2. コンストラクトの考え方

先述の導入科目では、学生自身が世界に対する態度の認識あるいは再認識を行うことで、(1) 学生自身が伸ばしたい人間的力を自ら認識し、(2) 修得の必要な正課の科目と正課外の活動を学生が自ら選択できるようになることを期待している。このうち(2)が円滑に行われるためには、人間的力育成科目それぞれに設定している教育目標が学生自身にとってどのような意味を持つのか、言い換えればその科目を受講することで学生自身にどのような成長が期待できるのかということが明確である必要がある。また、受講による自身の成長を容易にイメージすることができれば、翻って(1)の促進も期待できる。教育目標はしばしば行動目標として表現されるが、導入科目では世界に対する態度、言い換えれば世界の捉え方に注意を向けさせていることから、人間的力育成科目の教育目標も同様な表現がなされれば接続性が高くなると考えられる。

世界の捉え方を表す考え方の一つにコンストラクトがある。Georg A. Kelly によるパーソナル・コンストラクト理論^②では、コンストラクトとは世界を構成する概念を指す。この理論は、人間はさまざまな事象を経験し、事象間の類似性や差異を認知し、現象についての構成概念（コンストラクト；construct）を形成し、それに基づいて事象を予測しようとする、という仮説に基づいている^③。構成概念は双極的（二分法的）概念であり、それらが人間の解釈システムを構成すると理解される。この理論を背景とした面接手法を発展させた評価グリッド法^{④、⑤}は、人間の解釈システムのうち評価に関わる評価構造を階層的に可視化する手法として建築分野や心理学分野で多く活用されている。

人間的力育成科目の教育目標を表現する際にも、コンストラクトの考え方を援用することで考えられる。すなわち、各科目の学習内容に関連するコン

ストラクトの組み合わせで、行動目標とは別の形で教育目標を表現するということである。行動目標は多くの場合で行動とその対象が合わせて表現されるため、対象領域の文脈に強く依存している。一方で、コンストラクトは双極的あるいは二分法的な形容語の対という形をとり、行動目標に比べて抽象度の高い表現となる。また、コンストラクトは世界の認識を構成する概念であるという点で、導入科目で認識あるいは再認識した世界に対する態度、言い換えれば世界の捉え方との類似性が高いと考えられる。それゆえ、導入科目と人間的力育成科目の接続性を高めることが期待される。

3. 方法

3.1 コンストラクトの収集

導入科目である「人間的力ファンダメンタル」のレビューシートからそれぞれの人間的力育成科目に関連するコンストラクトの収集を行う。レビューの対象となる学習活動は、1つの論題に対して肯定、否定の両方の立場から立論、反論、主張を作成するセルフ・ディベートである。2021年度に実施した導入科目の試行では対面形式の授業の中でディベート形式のディスカッションを行っていた^⑥が、2022年度から授業がオンデマンド形式に変更されたことに伴ってディベート形式のディスカッションはセルフ・ディベートに置き換えられた。

それぞれの科目群とセルフ・ディベートの論題は表1の通りである。これらの論題は「正解のない問題」を念頭に各科目の担当教員との協議によって作成され、一般的な意見としては肯定とも否定ともつかないような論題とすることで、特定の文脈に依存した主張が出されやすくなることを意図したものである^⑦。受講者は各論題について肯定、否定それぞれの立場から立論、反論、主張を作成し、授業支援システム上のフォーラムに投稿することが求められる。また、他の受講者の投稿に対して返信機能でコメントすることで、それぞれの気づきを共有することも求められる。レビューシートでは、この学習活動を振り返り論題ごとに気づいた自身の「思い込み」を理由とともに記述することが求められる。コンストラクトは相対する形容語を両極

とした次元として捉えられるため、レビューシートに記述された気づきの内容を学生の視点や観点の変化をその次元内の変化と見做すことで、コンストラクトを解釈できると考えられる。あるいは、次元そのものに気づく場合であっても、気づきの内容から学生の視点や観点の変化に着目することでコンストラクトを解釈可能であると考えられる。これらの解釈を担当教員が行い、レビューシートから形容語対として表現されるコンストラクトを収集する。

表 1 科目群に関連するセルフ・ディベートの論題

科目群	論題
キャリア形成	具体的なキャリア目標を持つべきか、否か
ダイバーシティ	「みんなちがって、みんないい」という価値観は、競争社会において受容可能か、否か
ボランティア	ボランティアは自己満足か、否か
地域連携	地域連携による地域活性は持続可能か、否か
リーダーシップ	リーダーシップをとるのは牽引力のある人(たち)だけであるべきか、否か
ビジネス創出	ビジネス創出は大学や企業等のシーズに基づくべきか、否か

3.2 共通性と個別性の抽出

ひとりディベートの学習活動に対するレビューシートから収集されたコンストラクトについて、人間的な力量育成科目との関連性について調査を行う。具体的には、人間的な力量育成科目の担当教員に依頼し、担当科目の教育目標や学習内容に基づいて受講生に期待する視点・観点をコンストラクトの一覧から選択してもらう。その際に、受講生があらかじめ当該の視点・観点を備えていて、その次元内での立ち位置を変えながら学習活動に取り組んで欲しいといった場合と、学習活動を通して当該の視点・観点を新しく発見して欲しいといった場合に分けて回答を得る。ただし、本報告

ではそれらを区別した議論は今後の課題とし、以降の分析でそれらの区別を行わず単に科目と関連する視点・観点として扱うこととする。また、コンストラクトの一覧に記載されていない視点・観点があれば形容語対の形で新しく加えてもらうが、本報告では分析の対象外とする。

得られた回答データについて、科目と関連しないものを「0」、関連するものを「1」としてダミー変数を割り当てて潜在クラス分析を行うことでコンストラクトの分類を行うとともに、科目ごとの正反応確率（ダミー変数「1」の反応確率）からそれぞれの科目に特徴的なコンストラクト群を明らかにすることで科目の共通性と個別性と検討する。

4. 結果

4.1 コンストラクトの収集

2022年度の春クォータから冬クォータのそれぞれで開講された「人間的な力量ファンダメンタル」のセルフ・ディベートに対するレビューシートを分析の対象とした。セルフ・ディベートは論題をふたつずつ3回に分けて実施され、のべ455件のレビューシートが得られた。記述された学生の気づきの内容について、学生の視点や観点の変化を形容語対で表現される次元として担当教員が解釈を行った。その結果、112の形容語対がコンストラクトとして収集された(表2)。文脈によって異なる解釈が可能な形容語対については、括弧書きで意味が追記されている。

レビューシートにおいて、コンストラクトを表すような形容語が用いられずに学生の視点や観点の変化が記述されている場合には、担当教員の解釈によってコンストラクトを推測した。例えば、「短期的」や「長期的」といった形容語が用いられていないものの「時間軸を考慮していないことに気づいた」というように時間的な視点・観点について言及しているものは、担当教員の解釈によって「短期的-長期的」のコンストラクトに該当すると推測された。また、コンストラクトを表す形容語対のうち、一方の極についてのみレビューシートに記述されている場合には、担当教員の解釈によってもう一方の極にあたる形容語を推測した。例え

ば「専門的」という形容語のみが用いられているものは、もう一方の極として「汎用的」や「一般的」の形容語が推測された。そのため、収集されたコンストラクトの中には類似した意味の形容語対が含まれている。

表 2 収集されたコンストラクトの一覧

具体的-抽象的	過程的-結果的	狭い-広い(人間関係)
絶対的-相対的	持続的-断続的	狭い-広い(視野)
経験的-思索的	目的的-手段的	小さい-大きい(枠組み)
専門的-一般的	動機的-結果的	微視的-巨視的
専門的-汎用的	可能な-不可能な	小さい-大きい(可能性)
実践的-理論的	安心な-不安な	小さい-大きい(規模)
現実的-理想的	消費者の-生産者の	効率的-非効率的
善い-悪い	得意な-不得意な	低コストな-高コストな
良い-悪い	受給者の-提供者の	生産的-非生産的
正当な-不当な	成功の-失敗の	効果的-逆効果
理性的-感情的	活発な-緩慢な	低収益な-高収益な
ポジティブな-ネガティブな	個性的-没個性的	偶発的-計画的
高い-低い(価値)	前向きな-後ろ向きな	可変的-不変的
トップダウン的-ボトムアップ的	成長的-衰退的	状況依存的-普遍的
利己的-利他的	個性的-類型的	柔軟的-硬直的
対立的-協調的	努力的-怠惰的	流動的-固定的
競争的-協力的	縦の-横の(関係)	不安定な-安定な
個別的-普遍的	満足な-不満な	変動的-安定的
若年の-老年の	能動的-受動的	新規の-既存の
若者の-年配の	主観的-客観的	先進的-後進的
一方向の-双方向の	自由な-不自由な	魅力的-退屈な
強い-弱い	自由な-統制的	新しい-古い
裕福な-貧困な	選択的-強制的	革新的-保守的
独裁的-民主的	自発的-強制的	挑戦的-堅実的
独断的-合議的	生得的-経験的	おもしろい-つまらない
極端な-中庸な	主体的-従属的	有限な-無限な
ローカルな-グローバルな	積極的-消極的	個人的-社会的
地方の-中央の	先天的-後天的	本質的-表面的
地域間の-地域内の	素質的-能力的	個人的-組織的
多数派の-少数派の	才能的-経験的	個別的-集团的
共通の-独自の	内面的-外面的	部分的-全体的
特殊的-普遍的	一様な-多様な	構造的-要素的
標準的-例外的	単一的-複合的	私的-公的
普通な-特別な	一面的-多面的	内的-外的
直接的-間接的	単純な-複雑な	定量的-定性的
顕在的-潜在的	一元的-多元的	有形の-無形の
閉鎖的-開放的	択一的-重畳的	
短期的-長期的	狭い-広い(選択肢)	

4.2 共通性と個別性の抽出

本報告ではボランティア、ビジネス創出、地域連携の科目群に限定して、収集されたコンストラクトと人間の力量育成科目との関連性についての調査を行った。その結果、5名の教員が担当する18科目についての調査データが収集された。潜在クラス分析を行う前処理として、どの科目からも選択されなかったコンストラクトや複数の科目で全く同じように選択されたために区別のつかないコンストラクトを除外するために階層的クラスター分析(ワード法, ユークリッド距離)を行った, 分析にはHAD18.0⁶⁾を用いた。距離が0でク

ラスターを形成した39のコンストラクトを抜き出し、そのうちの科目からも選択されなかった14のコンストラクトは除外した。残りの25のコンストラクトは、複数の科目で全く同じように選択されたために区別のつかないものであったため、クラスターごとに代表となるコンストラクトを残して除外した。

前処理で得られた80のコンストラクトについて潜在クラス分析を行った。分析にはHAD18.0⁶⁾を用いた。潜在クラス分析では、通常は適合度指標を比較してクラス数を決定する。しかし、本報告ではコンストラクトの分類による各教科の特徴付けに主眼をおいているため、カテゴリごとの正反応確率が1となるクラスが、各カテゴリに1つ以上となるような最小のクラス数を探索した。すなわち、クラス内のすべてのコンストラクトが1つの教科と関連するクラスを、各教科が少なくとも1つもつようにモデルを決定した。その結果、16クラスのモデルを採用した。モデルの統計学的な妥当性は度外視しているため、適合度指標の比較については割愛する。

各クラスに所属するコンストラクトの数と代表例は表3の通りである。クラス1からクラス16に所属するコンストラクトの数は順に2, 1, 9, 4, 6, 8, 3, 4, 10, 7, 3, 4, 7, 4, 3, 5であった。また、所属するコンストラクトの代表例は順に次の通りであった。クラス1: 安心な-不安な, 私的-公的, クラス2: 個人的-組織的, クラス3: 個性的-没個性的, 素質的-能力的, など, クラス4: 新規の-既存の, 先進的-後進的, など, クラス5: 経験的-思索的, 挑戦的-堅実的, など, クラス6: 善い-悪い, 多数派の-少数派の, など, クラス7: 生産的-非生産的, 効果的-逆効果, など, クラス8: 効率的-非効率的, 低収益な-高収益な, など, クラス9: 正当な-不当な, 持続的-断続的, など, クラス10: 具体的-抽象的, 実践的-理論的, など, クラス11: 動機的-結果的, 構造的-要素的, など, クラス12: 若者の-年配の, 本質的-表面的, など, クラス13: 自由な-不自由な, 自発的-強制的, など, クラス14: 共通の-独自の, 個人的-社会的, など, クラス15: 絶対的-相対的, 狭い-広い(選択肢), など, クラス16: 対立的-協調的, 個別的-普遍的, など。

所属するコンストラクト群に基づいてクラス名は順に次のように命名された。クラス 1：社会的関係の視点、クラス 2：個人と組織の視点、クラス 3：個性の視点、クラス 4：前向きと後ろ向きの視点、クラス 5：発想と実践の視点、クラス 6：意見共有の視点、クラス 7：生産性の視点、クラス 8：効率性の視点、クラス 9：活動の意味の視点、クラス 10：課題把握の視点、クラス 11：因果関係の視点、クラス 12：価値観受容の視点、クラス 13：取り組み姿勢の視点、クラス 14：個人と社会の視点、クラス 15：判断基準の視点、クラス 16：相互理解の視点。科目ごとの正反応確率を表 3 に示す。紙面の都合上クラス 1 から 8 を上段、クラス 9 から 16 を下段に分割している。

5. 考察

潜在クラス分析によって、導入科目のレビューシートから得られたコンストラクトは 16 クラスに分類さ

れた。各科目が 1 つ以上のクラスによって特徴付けられるようにモデルを選択したため、科目の異同はどのクラスと関連しているかという点から説明することができる。すなわち、同じクラスと関連することを共通性、他とは異なるクラスと関連することを個別性と思ふことができる。表 3 の正反応確率が科目とクラスの関連性の高さを示す。ここで正反応確率が 1 であるもののみを抽出すると、例えば「体験の言語化」という科目はクラス 2：個人と組織の視点、クラス 14：個人と社会の視点という 2 つのクラスで特徴付けられる。同様に「起業特論 B」という科目はクラス 2：個人と組織の視点、クラス 13：取り組み姿勢の視点、クラス 15 判断基準の視点という 3 つのクラスで特徴付けられ、「地域連携」という科目はクラス 1：社会的関係の視点、クラス 2：個人と組織の視点、クラス 7：生産性の視点、クラス 10：課題把握の視点、クラス 12：価値観受容の視点、クラス 14：個人と社会の視点

表 3 科目ごとの正反応確率

	C1: 社会的関係	C2: 個人と組織	C3: 個性	C4: 前向きと後ろ向き	C5: 発想と実践	C6: 意見共有	C7: 生産性	C8: 効率性
ボランティア論	0	0	.000	.500	0	.735	1.000	.250
グローバル社会貢献論	0	1.000	.211	.500	.322	.873	1.000	.750
パスポートとボランティア	0	0	.774	.250	0	.490	0	.250
グローバルヘルス	0	1.000	.211	.500	.000	.735	0	.000
体験の言語化	.500	1.000	.000	0	.337	.372	0	0
ボランティアから見る世界	0	0	0	.250	.337	.739	.333	0
狩猟と獣害対策論	.500	0	0	0	.486	1.000	0	.750
狩猟と地域おこしボランティア	.500	0	.000	.250	1.000	1.000	.333	.750
イノベーション人材になるためのコーチング研修	.500	0	.338	0	.000	.490	0	.250
起業特論B	0	1.000	.000	.750	.493	.627	0	.000
Advanced Course on Entrepreneurship D	0	0	.225	1.000	.514	.000	0	.250
地域連携学	1.000	1.000	0	.500	0	.000	1.000	.500
地域連携演習：基礎演習	0	0	0	.000	0	0	.333	.000
地域連携演習：実践演習	0	0	0	1.000	0	0	0	1.000
地域連携演習：ケーススタディ	0	0	0	1.000	0	0	.667	.750
地域連携演習：コミュニティ・インターンシップ	0	1.000	.113	1.000	0	0	0	1.000
地域連携演習：レポート演習	0	0	0	0	0	0	0	0
地域連携演習：プレゼンテーション演習	0	0	0	0	0	0	0	0

	C9: 活動の意味	C10: 課題把握	C11: 因果関係	C12: 価値観受容	C13: 取り組み姿勢	C14: 個人と社会	C15: 判断基準	C16: 相互理解
ボランティア論	1.000	.429	1.000	0	.339	.750	0	.800
グローバル社会貢献論	1.000	.571	.000	0	.711	.750	.333	.829
パスポートとボランティア	.678	.429	0	.250	.158	.750	.333	1.000
グローバルヘルス	.379	.286	0	.250	.000	.750	0	.800
体験の言語化	.398	.143	.354	.250	0	1.000	.333	.415
ボランティアから見る世界	.000	1.000	.354	0	.395	.500	1.000	.509
狩猟と獣害対策論	.000	1.000	.354	0	0	.250	1.000	.000
狩猟と地域おこしボランティア	.226	1.000	0	.500	.000	.250	.667	.000
イノベーション人材になるためのコーチング研修	.407	.286	0	0	.794	.250	1.000	.579
起業特論B	.385	.143	.293	0	1.000	.750	1.000	.378
Advanced Course on Entrepreneurship D	.000	.571	0	.250	.400	.000	1.000	.672
地域連携学	0	1.000	0	1.000	0	1.000	0	0
地域連携演習：基礎演習	0	1.000	0	1.000	0	.750	0	0
地域連携演習：実践演習	0	1.000	0	1.000	0	1.000	0	0
地域連携演習：ケーススタディ	0	1.000	0	1.000	0	1.000	0	0
地域連携演習：コミュニティ・インターンシップ	0	1.000	0	1.000	0	1.000	0	0
地域連携演習：レポート演習	0	1.000	0	.750	0	.250	0	0
地域連携演習：プレゼンテーション演習	0	1.000	0	.750	0	.500	0	0

という6つのクラスで特徴付けられる。これらの科目とクラスの関連から、3つの科目の共通性はクラス2：個人と組織の視点であるといえる。さらに「体験の言語化」と「起業特論B」の比較から、「体験の言語化」の個別性はクラス14：個人と社会の視点であり、「起業特論B」の個別性はクラス13：取り組み姿勢の視点、クラス15 判断基準の視点であるといえる。本報告で調査した科目は「ボランティア」「ビジネス創出」「地域連携」の科目群に属している。それぞれの科目群内では関連するクラスが共通し、逆に科目群間では関連するクラスが異なる傾向がみられることから、潜在クラス分析によるコンストラクトのクラス分類と科目の特徴付けは一定の妥当性を有していると考えられる。

各教科と関連するコンストラクトのクラスは、担当教員が受講生に望む変化、すなわち科目として意図している受講生の成長を表しているため、教育目標のひとつの表現と見做せる。したがって、この調査と分析によって教育目標の共通性と個別性を明確にすることができたと考えられる。教育目標を行動目標として表現する場合には、対象領域に依存した行動について言及することになる。一方で、視点・観点として教育目標を表現した場合には、対象領域には依存しにくく、科目の共通性と個別性を明確化することができる。その意味で、本報告の調査と分析は新しい分析手法として有用であると考えられる。

この手法の成否でもっとも重要な点は、コンストラクトが適切にクラスに分類されることである。それについては、本報告で分類した16クラスでは十分にコンストラクトを分類しきれていない可能性があり、今後の検討課題である。コンストラクトと科目の関係を取得する調査において、サンプル数を増やすことでより適切なコンストラクトのクラス分類が得られることが期待される。

6. おわりに

本報告では、人間的力量育成科目とコンストラクトの関連性を調査し、その分類を行うことで各科目の共通性と個別性を明確にした。調査のサンプル数を増やすことで、人間的力量育成科目全体と共通性と個別性

を明確化することが今後の課題である。さらに、正課外の活動にも調査の範囲を広げることで、正課の科目と正課外の活動を円滑に接続するための、科目間の関係性を図示するようなツールの作成を目指す。それによって、修得の必要な正課の科目と正課外の活動を学生が自ら選択することが容易になると考えられる。

謝辞

早稲田大学グローバルエデュケーションセンター人間的力量教育部門の先生方には、調査の設計と実施について有益な助言をいただきました。特に、岩井雪乃先生、加藤基樹先生、島岡未来子先生、兵藤智佳先生（五十音順）には調査協力および助言をいただきました。記して謝意を表します。

参考文献

- (1) 村松慶一, 松居辰則: “人間的力量育成のための導入教育の設計と試行”, 教育システム情報学会研究報告, Vol.37, No. 1, pp.44-48 (2022)
- (2) G. A. ケリー(著), 辻平治郎(訳): “パーソナル・コンストラクトの心理学 第1巻 理論とパーソナリティ, 第2巻 臨床診断と心理療法”, 北大路書房, 京都 (2016); Kelly G. A.: “The Psychology of Personal Constructs, Vol.1. A Theory of Personality, Vol. 2. Clinical Diagnosis and Psychotherapy”, W. W. Norton, New York, (1955)
- (3) 若林明雄: “George A. Kelly の個人的構成概念の心理学”, 心理学評論, Vol.35, No.3, pp.311-338 (1992)
- (4) 讃井純一郎, 乾正雄: “レパートリーグリッド発展手法による住環境評価構造の抽出-認知心理学に基づく住環境評価による研究 (1) -”, 建築学会計画系論文集, No.367, pp.15-22 (1986)
- (5) 宇治川正人, 丸山玄, 讃井純一郎: “電子メールを用いた評価グリッド法の開発魅力あるガソリンスタンドの条件に関する調査研究”, 建築学会計画系論文集, No.518, pp.75-80 (1999)
- (6) 清水裕士: “フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案” メディア・情報・コミュニケーション研究, Vol.1, pp.59-73 (2016)